



健康に気をつけ最後まで戦い抜こう

校長 小川 義男

すでに進路の決まった人もあろうが、まだまだ戦い続けている人もいる。戦いは終わりに近づくとつれて一層苛烈になる。進路の決まった人も油断してはならない。それぞれが、卒業するまで、あるいは進学先が決定するまでしっかりと努力し続けてもらいたい。

しかし今日は、少し違う話題である。戦いのさなかの息抜きともなれば幸いである。軽率さから私が死にかかった話だ。用心のため、諸君にも知っておいてほしい。原因は水仙である。水仙を庭に植えるべく貰ってきたのだが、迂闊にもそれをニラと間違えて食べてしまった。スキヤキに入れて食べたのである。食べたのは「三口」くらいである。胃の底部のあたりから、かつて経験したことのない不快感が突き上げてきた。「吐く」などということはそれまで殆ど経験したことのない私だが、あの不快感こそ「毒性」というものなのであろう。

大変な不快感であったが、三度吐いたら、症状は落ち着いてきた。

諸君にも覚えておいてほしいが、水仙は美しいが有毒なのである。特に根は毒性が強く、死ぬ可能性も相当あるということだ。

私の少年時代、北海道では「人よりも馬の数の方が多い」と言われていた。耕作、運搬、共に主要な「動力源」だったためである。馬は、食べてから一時間もすると腹が減る。腹が減ると立ち止まって動かない。だから「馬車追い」は、エン麦などを積んでいて、一時間おきに食べさせていたように思う。さもないと馬は路傍の草を食べ始める。「道草を食う」という言葉は、ここから生まれたのである。

だが、馬は水仙はもとより毒性を有する草は絶対に食べない。その意味で私などは、「馬より遙かにおろかだ」ということになるのであろう。水仙の毒性、特にその根の猛毒は覚えておいてほしい、人にも教えて上げてほしい。

世界平和を守り抜く賢さ

イランの軍事面の最高指導者が、アメリカの無人機によって殺害された。第二次世界大戦が終

わって75年にもなる。これをきっかけに全面戦争になりはせぬかと心配である。しかし、その心配は杞憂に終わりそうだ。

このたびの軍事事件で一番驚いたのは、北朝鮮の独裁者ではないかと思う。今は衛星で探索して無人機で標的を攻撃できる時代である。

アメリカの特殊爆弾は、地下三十メートルを貫通するという話を聞いたことがある。北朝鮮の独裁者は飛行機嫌いと言ったが、イランで起きたことが北朝鮮で起こらぬという保証はない。このたびの「イラン事件」は、今後の非核化をめぐる米朝交渉にも大きな影響を及ぼすのではあるまいか。

私も行ったことはないのだが、イランは今日言われるような「絶対主義国家」ではなかった。私が生まれるずっと前だから、相当昔のことである。そこにはパーレビ王朝という比較的近代的な王朝があった。私の学生時代もそうであった。

パーレビさんは、とても良い王様だったように思うが、アメリカのカーター大統領が、もっとも「民主化」するように要求したらしいのである。私は「危険だな」と思った。しかし、パーレビさんは、これに協力しようとしたらしい。これに反発したイスラムの人々が反抗して、ホメイニさんという絶対独裁者の政権を確立したのである。

惜しいことだと、若き日の私は思った。それでもアメリカは圧力をかけ続けた。その結果が、暴徒によるアメリカ大使館占拠事件となって現れた。なんとアメリカ大使館は、二年ほど暴徒に占領され続けたのである。その間、館員たちに何が起こったかはだれも知らない。

アメリカは「キリスト教的一神教」の優れたところでもあろうが、常に自分の考えのみを絶対化する。仏教のおおらかな寛容性とは大変な違いである。一神教同士のぶつかり合い、それが今日ではイスラム教とキリスト教のぶつかり合い、イスラム同士の宗派葛藤となって現れているとすれば悲しい話である。私は日本の寛容な民族思想が尊いと思う。

それにしても、全面戦争だけは絶対に避けてくれるよう強く願いたい。

風邪を引かぬコツ

特に大切なのは、うがいと石けんを使った手洗い

部屋に湿度を保つ工夫はそれぞれに

特に留守にする日中は部屋に陽光を導き込む

十分な睡眠

食事は規則正しく、良く咬んで十分食べる

受験生にとっては難しいかも知れぬが、睡眠もしっかりとって十分に健康に留意して最大限の実力を発揮してもらいたい。

本校の実情をお知らせし、教育問題、社会問題等に関する本校校長小川義男の見解などをお読みいただくため「狭山ヶ丘通信」を発行いたしております。

また、本校 WEB サイトにてバックナンバーもご覧いただけます。<http://www.sayamagaoka-h.ed.jp/>
〒358-0011 埼玉県入間市下藤沢 981 TEL:04-2962-3844 FAX:04-2962-0656 狭山ヶ丘学園

大学キャンパスツアー

本校の生徒が大学の
キャンパスツアーに
参加いたしました。

東京大学キャンパスツアー(12月1日実施)

高等部1年B組 齊藤 力斗(練馬区立 石神井東中学校出身)

夏にオープンキャンパスにも参加したので、東京大学に行くのは今回が二度目だった。東京大学は自宅から三十分ほどで到着する。家からいちばん近い国立大学なので、学びを得る環境として最適だと感じた。

案内をしてくれた東大生の方は非常に親切であった。東京大学の良い点の一つとして、土地がとても広いことが挙げられる。都内にあるにも関わらず、あれほどの広大な土地を有しているのは大変素晴らしいと思う。

キャンパスツアーでは東大生に勉強について色々質問したいと思っていた。案内してくれた方々は附属中学を持たない私立高校、または地方の高校出身者で、私と同じような環境にいたようだった。東大生の一人に高校一・二年生の時にどれくらい勉強をしていて、どれくらいの成績をとっていたのか質問した。すると、一・二年生の頃はあまり勉強をしておらず、学校生活をとても楽しんでたとの意外な返事だった。最初から根を詰めすぎると途中で力尽きてしまうらしい。大事なのは勉強に対しての意欲、集中力を切らさないで三年間過ごすことだと教わった。私はまだ高等部一年生だが、二年後を見据えて着々と準備をしていくべきだと思っている。しかし、焦りすぎるとかえって良くない方向に向かってしまうと分かった。現役大学生の話はとても役立ち、また説得力があった。

今回のキャンパスツアーは非常に良い経験になった。今後、自分がどのような生活を送っていくべきなのかを考えるきっかけとなった。これからも色々な人の意見や助言を聞いて、自分なりによりよい判断をしていこうと思う。



早稲田大学キャンパスツアー(11月14日実施)

高等部1年C組 岩崎 雄紀(小平市立 花小金井南中学校出身)

今回の早稲田大学キャンパスツアーに参加した主な理由は、自分がどんなことに興味があるのか、それはどのような環境で学べるのかということを知り、今後の進路に役立てようと思ったからである。

当日は、各学部の説明を受けながらキャンパス内を巡回し、様々な施設を見た。その説明の中で「学際性」という事が印象に残った。ツアーの前まで大学という場所は一つの学問を究めていく場であると考えていたが、その考えは一変した。様々な分野から物事を見て考えを究めるという学際的な考え方は、学びたいことが明白に決まっていなかった私にとって新鮮に感じられた。

また、決められた学問の方法があるのではなく、自分自身で大学の活かし方を描き、それを大学側がサポートしてくれるという点にも魅力を感じた。例として挙げられていたのは、たとえ教育学部に進んだとしても必ずしも教員免許を取得しなければいけないわけではなく、それぞれの思う仕方でも教育学部を活用すればいいということだった。大学に進学することは道を限定していくことだと考えていたが、学際性の立場に触れたことで今後の進路選択のプレッシャーも軽くなったように思う。

早稲田大学は国内でも有数の外国人留学生の在籍数を誇るのとことで、国際交流も盛んであるとの説明を受けた。

学際性、国際性という二つの言葉から、一つの視点にとらわれず、複数の立場から物事を見ることを重視する考え方を知った。そしてそれを重視する早稲田大学の考え方は具体的に進路が決まらない私に一つの道を示してくれた。今回のツアーで学んだことを今後の進路選択に活かしたい。



2019年度 PTA 父母教室のお知らせ

今回は、ご多忙の中、前文部科学大臣の柴山昌彦氏をお迎えし、ご講演を頂くことになりました。一般の方を含め、どなたでも聴講いただけます。ご来場をお待ちしております。

講演テーマ「日本教育の今とこれから」

講師：前文部科学大臣 柴山昌彦 先生



日時 2月22日(土) 午後2時 場所 本校講堂(1号館4階)

新任教員列伝

歴史を見つめて走り続ける

社会科教諭
橋本 涼



入間市立藤沢中学校出身・平成23年本校卒
中央大学文学部人文社会学科日本史学専攻卒

当時在籍したのは、現在のⅢ類にあたる総合進学コースでした。どのクラスでもほとんどの生徒が部活動に所属していて、放課後は遅くまで活動する運動部に所属する者もいました。そうした集団の中で自分自身も陸上部で活動しながら、学業と両立していくことになりました。

中学校時代の先輩が所属していたこともあります。当時の陸上部短距離で顧問をしていた後のオリンピック選手でもある佐藤真太郎先生の人柄に惚れ込み、入学後はすぐに中学時代と同じ陸上部への入部を決めました。先生は優れた実績を残してきた現役の短距離選手でありながら、優れた指導者でした。指導の際に放たれる言葉は経験に基づいた説得力のあるものであり、それを聞く部員は惹きつけられていました。部員に対する飴と鞭の使い分けにも秀でたものがありました。威厳がありながら、温かい人柄で部員と接してくれる先生には一生ついていきたいとさえ思えるほどでした。残念ながら佐藤先生は学校を去られ、指導を受けることができたのは、最初の1年間だけでしたが、印象深く、今なお人としても尊敬している教員です。部活動では的確な指摘を受けても、なかなか思うように修正できず、選手として目立った活躍はできませんでしたが、厳しい練習をこなしてきた過程は間違いなく自分を成長させてくれました。

3年生の7月に部活動を引退するまでは、学業との両立にとっても苦労しました。平日は勉強時間の確保が難しかったので、最低限の授業の予習は朝8時からホームルームまでの時間と、それで足りなければ昼休みで遣り繰りしました。担任の佐藤雄健先生が私の意志を尊重してくれて、難関私立大学に多く挑戦する受験スケジュールを組むことになりました。浪人の希望はないが、難関大学ばかりを数多く受験して合格がなければ浪人の恐れもある背水の陣を布く作戦でした。その結果、どうにか中央大学に合格できました。

高校時代に経験してきたことでは他にも修学旅行でフランス・イギリスを訪ねたことが非常に刺激的な経験でした。海外の修学旅行も本校を選んだ理由の一つでしたが、歴史ロマン漂うフランスとイギリスで見たものや感じたことは、自分にとって革命的な刺激を与えました。目にしたことのない建築様式の建物を実際に見ること、その国でその国の料理を食べることは驚きや感動の連続でした。異文化に触れるたびに国際的な視野を広げているような気になりました。それからというもの、もっと他にもヨーロッパの世界を見てみたくなり、大学に入ってから自らの足を海外へと向けました。アルバイトをして貯めたお金のほとんどを海外旅行につき込み、イタリアとドイツへ行きました。観光地を歩き回り、歴史や芸術、文化に触れるだけでなく、現地で趣味のサッカー観戦を楽しむようにもなりました。その国の魅力を発見する一方で、改めて日本の豊かさやすばらしさを確認できます。行く前の準備においても、限られた時間で何をしようか、何をすべきかを考えることで、計画性も身につけていくことでしょう。このように海外に興味を持つ原点となったのは、修学旅行にあったといえるのです。

大学では専門の日本史をはじめとして、政治学、メディア論、環境学など興味がある学問分野の講義を可能な限り受講することで4年間はほぼ講義漬けの毎日でした。卒業論文は徳川綱吉の生類憐み政策です。人々にとって悪法とされてきた生類憐みの令ですが、近年では良い評価もされている面があると教わったことから強い興味・関心を抱きました。生類憐み政策が地方へいかに波及し、どのように捉えられていたのかを調査するために元禄時代の日記史料『鸚鵡籠中記(おうむろうちゅうぎ)』から関連の記述を抽出していきました。これによると江戸に比べて地方ではこの法令が徹底されているとは言い難く、罰せられる可能性がある生き物の殺生なども実態として密に行われていたことがわかりました。

教員を目指す決め手となったのは、母校での教育実習でした。実習直前までは、マスコミ関連の仕事を中心に就職活動をしていましたが、実習の3週間で気持ちは切り替わりました。教育実習は上手いかないことばかりで精神的につらくなることもあった一方で、教員という仕事に魅力を感じることもできました。職員室で目にしたのはベテランの先生であっても、さらなる向上や改善を重ねている姿でした。そのような生徒のための努力なら、力を尽くしたいと思えたのです。

学校はどれほどつらいことや苦しいことがあったとしても、楽しんで過ごそうとすれば楽しい場所になるものです。どのような学校生活をしていくかは、生徒それぞれが自分自身で選んで決めることですが、欲張ってできるだけ多くのことに挑戦してもらいたいと考えています。また、その中では高すぎるくらいの目標を設定して、本気でその目標を目指してもらいたいです。目標を達成できれば最高ですが、到達できなくても本気で最後まで試行錯誤した過程が、必ずその後の人生において生きる活力になります。教員としては4年目になりますが、これからも生徒たちには目標達成へ向けて努力する過程の重要性を伝えていきます。